〈青森県史〉の窓

176

弘前公園の染井吉野

中園　美穂
（弘前大学非常勤講師）

写真①　弘前公園の西濠に咲き連なる染井吉野
＝大正中期～昭和初期・青森県所蔵県史編さん資料

1895（明治28）年5月に弘前公園が開園した。公園は大名の居城だった旧弘前城が一般に開放されたことを意味した。松や杉などの古木が旧弘前城の景観に趣を与える一方、日清・日露戦勝記念や皇室記念行事により、桜が本格的に植樹されていった。

公園内に多く植樹された桜は吉野桜と呼ばれたが、京都の吉野山の桜ではない。従来とは異なる新しい桜で、近世末期に東京の染井村の植木屋が売り出していたものだった。その後、吉野山の桜と区別するため、1900（明治33）年に吉野桜を染井吉野と命名したことが学術雑誌に掲載された（勝木俊雄『桜』）。

18（大正7）年に第1回弘前観桜会が開催され、青森県商工協会の弘前部会長が市に対し、観桜会の開催を記念して公園内に500本の桜を寄附した。この桜の多くは染井吉野だと考えられる。実は、染井吉野は安価であるため大量に購入することができた。成長が早く「誠に強い桜」であり、咲き揃えば壮観となる様子が世間の嗜好に合ったのだ（三好学『桜』など）。

こうした特徴を持つ染井吉野は、各地の公園や河川の堤など公共の空間に植樹されていった。染井吉野は桜のトンネルのような光景を生み出した。弘前公園の西濠が好例であろう（写真①）。

染井吉野の花のシーズンは10日間程だという（佐藤俊樹『桜が創った「日本」』）。現在の弘前さくらまつりの開催期間は14日間程だが、戦前の弘前観桜会は10日間程だった。戦前の方が染井吉野の花のシーズンに合わせた開催期間だった。

30（昭和5）年に、鉄道省が『鉄道旅行案内』を刊行した。その中で奥羽本線の項目には「鷹揚園の桜」と題し、天守と下乗橋を背景に満開の桜を配したモノクロ写真が掲載された。同案内の附録には全国桜の名所番付があり、弘前公園は西の前頭35枚目に選ばれた。その後、鉄道省は40（昭和15）年に『花と郷土』を編さんし、弘前公園の主な桜が染井吉野で、桜の影をうつす濠や、桜花の中に古城を仰ぎ見る景趣が他では見られないものと紹介した。

西濠の桜は染井吉野の特徴を象徴する光景だが、古城と桜の構図は国際観光向けの被写体として好まれた（写真②）。弘前公園は戦前に植樹された染井吉野を中心に桜の景観が形成された。その桜の景観は公園を維持管理する人たちの努力によって成り立っている。

昨今、公園内にある日本最古の染井吉野や日本一太い染井吉野も注目されている。弘前公園には染井吉野をはじめ、さまざまな桜を深く知ることができる文字通りの桜の名所といえるだろう。

写真②　『陸奥曲』に掲載された「弘前の桜」
＝昭和初期・青森県所蔵県史編さん資料

『東京と青森』625号、
東京青森県人会　2020年5月